



分断の時代に思う ——二元論を超えて

一橋大学大学院社会学研究科 教授 佐藤 文香



先日、アメリカの大学で保守派の政治活動家チャーリー・カークが殺された。トランプ大統領の誕生に大きな貢献をしたことは知っていたが、これまで特に彼に注目をしたことがなかったわたしにとって、この暗殺事件は最初、銃社会アメリカにありがちな悲劇のひとつに過ぎなかった。

だが、日本のメディアやSNSでも犯人像の推測が飛びかいはじめ、これは昨今の分極化した世相を端的にうつしだす事件だと感じるようになった。トランプ大統領をはじめ、当初は「暴力的な極左」の仕業と断定する声が大きく、銃弾の刻印とされるメッセージの解釈がまことしやかにささやかれた。その後、それらは誤報とする声が大きくなり、実は「極右の内部抗争」だと解説が、知識人から聞こえてくるようになった。言葉のニュアンスは異なるが、ここには共通する構造があるだろう。それは、自らの属する思想的陣営の外側に悪を見出そうとする思考だ。悪いものは常に外からやってくるといわんばかりの解釈合戦に、昨今のグローバルな思想的分断と政治的亀裂の深さを感じとったのはわたしだけではなかっただろう。

その後は、カーク氏の死をめぐる人々の感情的な応酬がおとずれた。それは、わたしたちが人の死を政治的・イデオロギー的に消費する時代を生きていることをまざまざと感じさせるものだった。ある者は言う。彼はこれまで多くの人を傷つけてきたのだから、この死を招いたのは彼自身だ、と。言論の報いとして当然の死？ ごく普通の若者が悪びれもせずそのように述べる姿にわたしは驚愕した。間をおかず、カーク氏の暗殺を喜ぶような不埒な投稿をした者は解雇せよ、との声があがった。その死に責任があると述べた側の人々は、この解雇を自己責任とせず、強者の権力の不当な乱用に憤った。

大学で教員をしているわたしにとって、今回の事件をめぐる騒動には既視感がある。大学を、真理の探究のために異

なる見解を闘わせる場というよりは、正義の追究のため誰も傷つけないことを保障すべき場と捉える人々はますます増えている。大学に通ったことがなかったというカーク氏が、学生たちとの討論に全国行脚していたのもこうした背景あったのことだった。社会正義の追究という目的に外れた言動をよしとしない人々は、自らが「差別主義者」と見定めた人々に発言の機会を与えることを暴力への加担と見なす。「人を傷つける可能性のある者にプラットフォームを与えてはならない」と、彼らの言論の自由を阻止することも厭わない。

こうした変化を「進歩」の言葉で捉えてきた大学人は少なくないはずだ。かつて野放しにされていた社会的不正義や言論の暴力を正しい感受性で糺すことに何の不都合があるだろうか、と。わたしも長らくこの転換を支持し、後押ししてきた側の一員であったと思う。だが、今、その到達点において起こっているさまざまな帰結を見るにつけ、けっして手放しで言祝ぐだけではすまないと感じている。

いくつかの動画をさらってみただけでも、カーク氏の言論の多くはわたし自身の思想信条とは明確に異なっていることがわかった。だが、わたしは、「人を傷つける恐れがあるから」という理由で言論の機会を奪うこと、ましてや命を奪うことを正当化することはできないと思う。

この分断の時代に、わたしたちは、敵／味方の二元論を超えていかねばならない。見定めた「敵」の中にも感じとることのできる小さな共感を育み、「味方」だと考えていた者に許されざる言動があればやはり見過ごさないこと。何を当たり前のことを言っているのかと訝られるだろうか？ だが、分断の先に思想的殲滅を招く危機は想像以上のスピードで進行している。道理のわからぬ他者を嗤っている間に、どれほどの愚かさに浸食されてきたのか。ひろがりつづける溝が修復不能になってゆく様を前にして茫然自失としてはられないのだ。

事業報告

2025 年度講演会

ジェンダー視点でひもとく 当たり前のデザイン

講師

池田 美奈子 さん

(Edit-and-Design 主宰、編集者・デザイン研究者、九州大学客員教授)

9 月 27 日(土) 標記の講演会が、フリーランスのデザイナーである池田美奈子さんをお招きして開催されました。厳しい暑さも少し和らいだ秋晴れの日、見晴らしの良い 14 階の会場はほぼ満席で、お祭り騒ぎの下の広場に劣らぬ愉快的な賑わいに満ちた講演会でした。デザインということで、講演内容がビジュアルであったのも、多くの人を笑顔にしました。

「1. ジェンダーとデザインの出会い」「2. ジェンダー・イノベーション」を押さえた上で具体例へと話は進みます。「3. ジェンダー視点がチャンスに」で取り上げられた Women in Hotels プロジェクトでは、キャリアウーマンが出張で利用しやすいホテルのポイントを男性利用客との比較で論じたもの¹。「4. 当事者がデザインするエンパシーとコ・デザイン」は、パット・ムーアの老女なりきり体験を取り上げてのエンパシーの解説と、九州大学芸術工学部図書館の改築を学生参加(コ・デザイン)で行った池田氏自身の実践とを例に、デザインの時代的変遷を、for people から with people へ、さらに by people へと見事に捌いたもの。

圧巻は「5. ジェンダー視点で読み解く、人とデザインの相互作用」で、膨大な資料によって読み解かれた自動車デザインの変化は、フェアレディ Z、軽トラック、それぞれの販売広告のキャッチ等々。懐かしさと、目からウロコのジェンダー分析で、会場は笑いに包まれました²。最後は「6. デザインの方法：ジェンダーから多様性のデザインへ」として、バイアスを克服するいくつかの実践ツールを解説し、未来への展望を示して下さいました。面白いのは、バイアスを克服ではなく味方につけようという逆説的提案です。講演は刺激に溢れ、あっという間の 1 時間半でした。その後の



質疑応答も活発で、質問者はさまざまなテーマを深掘りしてくださいました。源氏物語研究に打ち込んだ学生時代、ドイツ留学での Bauhaus との出会いを経て、今日、編集とデザインに打ち込む池田さん。これまでの人生を振り返って、何一つ無駄なものは無かったとキッパリ。迷い多い日々の暮らしにある私たちを、大いに勇気づけて下さいました。

1 この話題は、本誌『LIBRA』58 号の巻頭言「デザインの可能性をひらくジェンダー視点」として 2016 年にご寄稿いただいています。研究所の HP からご覧いただけます。

2 本研究所の 25 周年記念論集『ジェンダー研究が拓く知の地平』所収の池田論文「ジェンダーデザインの視座——ジェンダー化するクルマとデザインの相互作用」をベースにして論じたものです。

小川真里子(東海ジェンダー研究所理事)



参加者のアンケートから

建築デザインに関わる仕事なので「デザイン」の定義が「望ましい状態に変えるための行為」ということに納得しました。社会の時代変化と文化が大きくデザインに影響していて、うまく選択して納得できるデザインに落とし込む力が大切だと思いました。

今まで、人間の生活について、グローバルな見方をする機会がいかに少なかったか、改めて考えさせていただきました。人々が幸せに生きていくためには困難な問題もありますが、改善することこそ、人間だと思いました。

軽トラックについての説明は目からウロコの感じもあって勉強になりました。トレードオフを解決していくことは、デザインという営為の大好物という話はとてもさざりました。

個人研究助成受託者報告会

2025 年 7 月 5 日（土）、昨年度の個人研究助成受託者 4 名に、昨年度ご事情で発表が叶わなかった一昨年度の受託者 1 名を加えた合計 5 名による報告会が、本研究所のセミナー室で開催されました。報告はオクスフォード大学大学院に留学中の小林亜伽里さんとデューク大学大学院に留学中の石幡祐輔さんの Zoom による発表から始まりました。

小林さんのテーマは「西洋文学史上最初の女性の職業作家、クリスティーヌ・ド・ビザンの著作『運命の変転の書』（1403 年）におけるトランスジェンダー的著者性の分析」というもので、25 歳で寡婦となったクリスティーヌの運命の変化を扱うものです。この過酷な運命に対し、男性の行為とされた文筆でもって身を立て職業作家となっていく中世の傑出した女性の生きざまを、トランスジェンダーをキーワードに読み解く試みです。

石幡さんの「ジェンダー先進国における出生率低下の要因に関する経済学的分析」は、ジェンダー平等が達成されれば、出生率は上向くだろうという常識を打ち砕くもので興味深く伺いました。男女平等が実現すれば、女性の学歴は高くなり結婚年齢も上がります。それと共に収入も増え、社会的視野も広がり、子どもを持つことは異なる価値の選択も色々引き出され、出生率の低下も起こりえます。石幡さんの分析も多岐にわたり、短時間で消化できない点も残りましたが、少子化対策の難しさはしっかり残りました。

会場での最初は、**波塚奈穂さんの「パナマ先住民女性の社会的・政治的地位向上の要因——オマール・トリホス政権下の教育改革に着目して」**と題する報告です。トランプ大統領がアメリカに取り戻したいと述べて話題になったパナマ運河の地が舞台で、歴史を知らなければなおのことアメリカが領有すべきものではないことが分かります。長いパナマでのフィールド・ワークに支えられた研究は、その地にあってこそ知り得た複雑な事情を明らかにしてくれました。

波塚さんと同様、東京から来場して下さった**余楽さんは中国からの留学生で、「〈長女〉に生まれるということ——湖北省農村における姉弟関係とジェンダー」**と題して、〈一人っ子政策〉の時代ながら、規制の緩い地方農村部で生まれた女の第一子（長女）が、女であるがゆえに弟との関係で直面する厳しい現状について報告がされました。男女平等を国家の建前とする国で、長女であるがゆえに何かと弟に搾取される境遇に会場は呆然。しかし翻ってみれば、私たちの母親世代



も五十歩百歩の境遇を強いられてきたとも言えそうで、次世代に引き継がれぬよう願うばかりです。

最後は、**九州大学大学院からの坂田舜さん。「地方紙に見る 1950 年代のトルコ共和国東部における女性」**というタイトルではわかり難いかもしれませんが、トルコ東部に多く居住するクルド人女性に関する報告でした。地方新聞から女性に関する記事を拾うという骨の折れる仕事に挑まれた成果です。記事があつてその内容を問うのも大変ですが、記事が上がってこない裏事情を読み解くというのも大変なことです。「女三界に家無し」と言われますが、男性の庇護の下にとされるのはもう結構ですが、国がないクルド人女性は、どんなにか大変です。

どのご発表も興味深く、論文として読ませていただくのを楽しみにしています。今年の報告会には、女子高校生がお一人参加されました。初めてのことです。6 月に名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリで行われたジャブロンカ氏の講演では『マチズモの人類史』という彼の近著を取り上げていましたが、男子中学生が参加していたのには驚きました。ジェンダー問題に関心をもつ若い人の存在は嬉しいことです。

小川眞里子（東海ジェンダー研究所理事）



INFORMATION

● 2025年度 研究助成受託者の決定

個人研究助成 4名(応募総数43名)

氏 名	研 究 題 目
大沼 敦子 (国立釧路工業高等専門学校創造工学科准教授)	ジェンダー平等啓発資料に潜む『差別表現例示』のパラドックス ——『男のクセに』『女のクセに』がもたらす負の伝播と再生産プロセス
生木 新菜 (早稲田大学社会科学総合学院助手 (博士課程在籍))	女性なぜ排除されたのか？ ——母性・国家・市民権の交錯にみるイタリア女性選挙権の不成立構造
渡邊 麻友 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 アフリカ地域研究専攻一貫制博士課程3年次)	ナミビア福音ルーテル教会における女性牧師の躍進 ——ジェンダー平等政策に着目して
瑞秀 昭葉 (東京大学大学院総合文化研究科 地域文化研究専攻博士課程 6年)	19世紀後半から20世紀初頭ドイツにおける愛と友情の境界 ——ホモエロティシズムの周縁化と異性愛主義の強化

団体研究助成 2団体(応募総数3団体)

研 究 団 体 名	研 究 題 目
英語教育とジェンダーの歴史研究会	女子ミッションスクールにおける英語教育とジェンダーの歴史 ——第二次世界大戦前後の転換に着目して
文献資料と統計分析を通じた 日本人の意識形成過程の検証研究会	「ジェンダー平等意識」と歴史・文化的背景との関連性に関する、 文献資料と統計データを用いた検証 ——異なる歴史・文化的背景を持つ沖縄県との比較から

お知らせ

2025年度

ジェンダー問題講座

日 程 2026年2月14日(土)13:30～15:40

講 師 西村裕一さん(慶應義塾大学大学院法務研究科教授)

テ ー マ 天皇制と性差別

詳細はチラシやホームページでお知らせします。

賛助会員を募集しています。

賛助会費 年間 一口 1,000円

振 込 先 郵便振替口座 00820-0-77338
公益財団法人東海ジェンダー研究所
(振込手数料は当方負担)

他行からお振込みの場合

銀 行 名 ゆうちょ銀行
店 名 〇八九
預金種目 当座
口座番号 0077338
(振込手数料はご負担ください)

* 会員の皆様には当研究所の年報『ジェンダー研究』や
ニュースレター『LIBRA』、講演会などの事業のご案内を
お送りします。

* 当研究所は公益財団法人の認定を受けており、会費及
び寄付については税法上の優遇措置があります。

編集後記

分断の時代に敵/味方の二元論を超えていかねばならない。難しいこと
ですが、どんな小さなことでも一緒にできることを見つけて、危機的
な未来を回避する第一歩でしょうか。一方デザインを通して世界を見ると、
過去から現在、未来へと少しずつでも良い方向へ変わっていくように感じら
れました。

LIBRA

公益財団法人 東海ジェンダー研究所

〒460-0022 名古屋市中区金山1-9-19 ミズノビル6F

T E L 052-324-6591 F A X 052-324-6592

E-mail info@libra.or.jp <https://libra.or.jp/>